

# アトリエ 琉游舎 だより 114号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2021年9月22日発行

## 雷乃発声 雷乃収声へ (雷すなわち声を発す) から (雷すなわち声を収む)

- 今年の二十四節気「秋分」は9月23日から10月7日までです。秋風が心地よく次第に空が高くなっていく頃です。その秋分の初候が「雷乃収声」になります。夏の間夕立をとめないゴロゴロと鳴り響いていた雷がおさまる頃です。「春分」の末候は「雷乃発声」です。つまり3月の終り頃から9月の末に掛けては、いつでも雷の音が聞こえる季節だったのです。
- 雷乃発声とともに生き物の動きが活発となり、雷乃収声とともに生き物たちは落ち着きの時を迎えるようです。気候も突然の豪雨や雷がやって来る激しい天気から、移動性高気圧によって天気が周期的に変化する、落ち着きのある気候がやって来ます。本格的な秋です。
- 自然の周期から見ると「雷乃発声」と「雷乃収声」を活動期と休息期の起点と考えてもあながち間違いとは言えないと思われれます。春になって目を覚ましたり再生したいのちたちが活発に動き出す春と夏は、鳥や蝉たちの声に突如割って入る雷の音がりましたが、秋から冬はいのちたちの眠りや死から再生への準備の季節です。秋はまだ虫たちの声が姦しく鳴き競っていますが、いつの間にか静かな冬へとなくなっていきます。雷の声も聞こえません。
- 実はこの様な感想を抱くのも私が太平洋側にしか住んだことがなく、特に雷銀座と言われる北関東の住人だからかもしれません。日本で一番雷の発生率が高い県は石川県です。以下福井、新潟、富山といずれも日本海側、そしてほとんどが冬の雷です。二十四節気七十二候の言葉が全く当てはまりません。日本は一年中雷の音が聞こえる国土のようです。
- ところで社会に「雷が落ちる」ことが少なくなったような気がしませんか。目上の人からどなられて叱られる雷ではなく、怒りと権力に任せて弱い物を怒鳴りつけ支配するパワハラが取って代わっているようです。「親父の雷」や「上司の雷」には愛情を基盤として教え諭す教育機能がありました。雷を落とす人がいなくなったら放任と無視がはびこる身勝手な社会となるか、パワハラで押さえつけられ誰も物言わぬ世の中となるでしょう。今が「雷乃収声」の時であるならば日本は眠りへと向かっているのです。再び「雷乃発声」の時が来て再生するのか眠り続けたままなのか。一年中雷の音が聞こえる日本に戻る日は来るのでしょうか。

**読書会** 日蓮の「立正安国論」と  
 9/28・10/12 消息文を読みませ。テキ  
 火曜13時半 ストもすべてご用意。

**写経会** 般若心経・自我偈・観音偈の手本  
 10月3日(日) を用意しています。初めての方も  
 13時半 すぐにできます。

**映画会**  
 9月30日(木)  
 お休みします

10/7 木	13時半	検察官閣下 (102分)	ゴーゴリー原作。ロシアの片田舎で薬の行商をするゲオルギーとヤコフ。彼らはインチキ薬の正体がばれて投獄されることになるが、町は変装した検察官がやって来る噂でもちぎりで、
10/14 木	13時半	真珠の首飾り (95分)	ゲーリー・クーパー、マレーネ・ディートリッヒ主演。女泥棒マデリーンは、パリの宝石商から真珠の首飾りをだまし取りスペインへ逃走する。国境の検問で焦った彼女は、
10/21 木	13時半	ビッグ・トレイル (120分)	ジョン・ウエイン主演。次々に襲いかかる困難に立ち向かいながら、新天地へ向かう幌馬車隊の旅を描いた西部劇。J・ウエインの初主演作。
10/28 木	13時半	心の旅路 (128分)	第一次大戦の後遺症で記憶喪失になった男と、彼を助ける心やさしいポーラの恋愛を描いたメロドラマ。ジェームズ・ヒルトンの原作。

先日檜枝岐村に行ってきました。目的は燧ヶ岳に登るためでしたが六合目を過ぎた熊沢田代の湿原地帯で雨が本降りになったため、無理をせず引き返してきました。雨で川のようになった急坂の岩場を滑りながら転びながら何とか登山口まで戻ることができました。頂上に辿り着くことができずに引き返したため気分は消化不良ですが、旅館のチェックインまで時間に余裕があったので振り仮名がないと読むことが難しい檜枝岐村（ひのえまたむら）に興味を持つことができました。名前から類推すると檜の枝のように道が二手に分かれている分岐の場所ということでしょうか。実際ここから新潟魚沼に通じる道と群馬の沼田に通じる道が檜枝岐で一本になり、会津若松方面へとつながっていきます。現在車で檜枝岐から沼田へ抜けることができません。峠を下るとそこは尾瀬です。昔は人馬が行き交った尾瀬の袂を通る沼田街道は、今は徒歩でしか歩くことができないのです。尾瀬の自然を保護するために昔の幹線道路は、現在徒歩専用道路となっています。

檜枝岐村は日本有数の豪雪地帯です。20年ほど前までは一晩で1疋も積もったそうですが、最近はいせいで30cmだとのこと、それは助かりますねと言ったら否定をされました。雪が沢山降らないと尾瀬の植物が元気に咲き誇らず作物も美味しくならないとのことです。雪の下でエネルギーをため込んだ植物の根が雪解け水と初夏の太陽で一気にパワー全開となるからでしょう。雪が多いことの苦労を歎くことよりその雪を恩恵と考え利用することで生活を豊かにできる人びとには、雪をありのままに受け入れる智恵が具わっているに違いありません。雪の冷蔵庫は凍らせることなく食物を保存できるでしょうし、雪が降れば降るほど雪に覆われる保温効果で村全体がかまぐらのようになり、思いのほか暖かい冬を過ごせるようなのです。

「ロバを連れた老夫婦」という寓話があります。最近ではトヨタ自動車の社長が株主総会で、マスコミの何でも批判する論調を逆批判する文脈で引用していました。話の粗筋は「ある峠道にロバを連れた老夫婦がロバに乗らないで、ロバを連れていて『ロバがいるのに乗らないのか？』『それはもったいない』と言われ、ロバに2人で乗っていると今度は『ロバがかわいそうだ』と言われ、ご主人だけがロバに乗っていると『威張った旦那だ』と言われ、逆に奥さんだけがロバに乗っていると『あの旦那は奥さんに頭が上がらない』と言われる」という寓話です。話のバリエーションはいくつかあっても大意はみな同じです。日本の小学3、4年生向けの道徳授業に「周囲の意見に流されない、自主や自律の大切さ」を学ばせるための教材として「ロバを売りに行く親子」のバージョンが利用されているようです。同じ寓話でも批判をどう受け取るかで引き出される教訓や結論が違ってきます。トヨタの社長が引用した理由は「勝手なことを言う前になぜ老夫婦がロバに乗らずにいるかの理由を理解しなさい」という事でしょう。教科書は「考えがあってロバに乗らずにいるのだから他人の意見に右往左往してはいけない」という事だと思えます。寓話は何らかの教訓を人に与えることが目的ですから、人間感情を典型的パターンに類型化しないと寓話として成り立ちません。

「もったいない」「かわいそう」「ずるい」「おかしい」などの間で動く感情の揺れをある判断に類型化していくことで教訓を成立させているのです。そしてそこに社会の価値基準を適用したものが道徳です。ところが仏教は人間の感情を執着という言葉で認識し、その執着からどうやったら自分自身が解放されるかを実践する宗教です。仏教術語で言う「真如」や「実相」や「空」、つまり「ありのままに観る」ことは社会が求める人間感情の類型化を拒絶することです。そこから行ないが生れそれが悟りの道であるという教えです。

もし私がロバを連れた老夫婦を見たらどのように観るでしょうか。まずそこで彼らと出会う因縁があります。私にも「もったいない」や「おかしい」などの感情が生まれるかもしれません。しかしその感情を整理したり判断しないことが「ありのままに観る」ことなのです。もしそのまま何事もなくロバが私の前を通り過ぎればそれも彼らとの因縁です。またロバの息が荒いことに気づいたとしたら「老夫婦は疲れたロバを労っているんだ」と思うかもしれません。これも因縁です。その時「ご苦労様」の声を掛けるかもしれませんし、そのまますれ違う行きずりの光景となるだけかもしれません。その因縁のなせるがままに行うことがありのままに観るということ。感情を価値判断することで行動がなされることでは決してないのです。

それは社会規範や道徳からまったく関わりが無い、なにものにも束縛されない自由な心と行ないなのです。それではあなたは流れに流されるままに生きていくだけではないか、どこにあなたの自己はあるのか、という批判は当然あるでしょう。信仰者が流れのままに委ねる流れは言うまでもありませんが法律や倫理や利害ではありません。仏教の根本の世界観は諸行無常、諸法無我、つまり世の中のすべての現象は常に因縁によって変化生滅し永久不変なものではなく、不変の実体である我（自己）も存在しないという考えです。そしてその流れ自体が涅槃寂靜、つまりやすらぎの処そのものなのです。法華経に信を置く私の流れは久遠実成の釈迦牟尼仏の示す永遠のいのちです。念仏の徒にとってのそれは阿弥陀仏の救いです。その流れのままに流されることが「信」に身を委ねることです。身を委ねることは自力の仕業です。そして流れ自体は他力の仕業です。どこまでが自力でどこまでが他力などと言う議論は無意味です。自他一如、自他不二なのです。

檜枝岐の道の駅では新鮮野菜を売っていません。理由を尋ねるとキノコも山菜も野菜もそのまま食べる以外はすべて貯蔵用に塩漬けにするからです。半年間の食料をため込まないと春を迎えられないのです。ありのままに豪雪を受け入れた彼らの智慧、と称賛することは容易ですが、顧みて私の日々の日常ではありのままに受け入れて生活していることが何かあるのだろうか、と振り返る檜枝岐紀行となりました。